

ひろ ゴミ拾い

まいにち
毎日、ドロシーはおじいちゃんといっしょに
さんぽ
お散歩をします。おじいちゃんはとてもとし
と
取っているので、つえをつきながらある
歩くのも、
ゆっくりです。ふたりいえで
おかし屋さんへ
むみちある
向かう道を歩き、おかし屋さんにつくと、いま
き
来た道をもどります。そして家に着くと、また
やむある
おかし屋さんへ向かって歩きます。それをなんど
かえ
くり返すのです。ときには、い
行ったり来たりを4回も
かい
することさえありました。

しず
そこは静かないなかみち
道で、くるま
車はたまにとお
通る
くらいでした。



ドロシーとおじいちゃんは、楽しく話しながら
散歩をすることもありますが、特に話す
ことがない日もありました。そういった日には、
ドロシーはゆっくり歩くのがじれったく
なりました。そして、散歩以外にしたいと
思うことをいろいろと考えてしまいました。

ある日のこと、ドロシーは、川の土手や
かきねの木や花を見ていて、ふと思いました。
(道はきれいなのに、そこらじゅうにゴミが
落ちてるなんて、せっかくののどかな風景が
だいなしだわ。)



そこでドロシーは、ゴミ袋とガーデニング用の
手袋を持って散歩に行くことにしました。
そして、落ちているゴミを拾っては、ゴミ袋に
入れていきました。しばらくすると、
おじいちゃんも関心を持ち始め、ドロシーが
気付かなかったゴミをついで指し示して
教えてくれるようになりました。拾うのが
むずかしいようなところにあるゴミでも、
ついでにつつき出してくれました。

ゴミ袋がいっぱいになると、道も
だんだんときれいになってきました。



ふたり まいにち みち ひろ
二人は毎日、道ばたのゴミを拾いました。
さん ぽ
散歩するのがだんだんとおもしろくなり、
ドロシーはいつの間にか、散歩に行くのを
ま どの おも
待ち遠しく思うようになっていました。

そんなある日のことです。二人は、わくわく
するようなニュースを ^{みみ} 耳にしました。その ^{ちほう} 地方で、
きれいな ^{むら} 村コンテストがあり、ドロシーたちの
^{むら} 村が ^{ゆうしょう} 優勝したのです。

「きっと、おまえが ^{みち} 道を そうじしている ことも
^{やく} 役に ^た 立ったと ^{おも} 思うよ。」と、おじいちゃんが
^い 言いました。

「おじいちゃんも、^{てつだ} 手伝ってくれているわ！」
ドロシーはほほえみながらおじいちゃんを
だきしめました。「もし ^{まいにち} 毎日 ^{さん ぽ} 散歩していなかったら、
こんな こと していなかったわね！」

